

医療支援第15陣報告



理事 玉井 修

【医療支援活動撤収へ向けて】

岩手県大槌町城山体育館の避難所における医療支援も遂に撤収の時期を模索するようになっていた。5月の連休明けには既に地元の医師による地域医療が始まり、医療災害支援は元の地域医療へと円滑に移行させていく時期に差し掛かっていた。これまで多くの医療人がこの派遣に参加し、大槌町との強い信頼関係を築いていた。上手に引いてこななければ、これまで積み上げてきた絆を無にする事にもなりかねない。私は5月23日に現地に飛ぶつもりであったが、県医師会からの情報によると5月21日で終了となるかもしれないとの連絡があった。私は岩手に行けないのか？と不安にもなったが、何故かしら私は必ず岩手に行く事になるという確信があった。5月14日、現地対策本部との協議の結果支援活動が5月末日に終了と決定され、ついに5月23日の出発が決定された。私は正直嬉しかった、これで岩手に行ける、そのためならどの様な条件も飲むつもりであった。翌週5月16日に避難所の現状についての説明を受けた。私に課せられた大きな任務は円滑な撤収作業であり、避難所住民の信頼を傷つけることなく円滑に業務を移譲する事であった。そのため派遣期間は当初の7日間から10日間に延長されたが喜んで承知した。事前説明会の最後に私は笑顔でお別れを言い、笑顔で無事に沖縄に帰ってきますとお返事をした。

【岩手大槌町にて】

5月23日、那覇空港に初めて家族を見送りに呼んだ。彼らは私の背中に何を見たのだろうか、それはきっとずっと後になって解るはずだ。

今回の震災支援を決定したのは政治でも官僚でもない、民の発想でリスク覚悟で被災地入りを決めた。未曾有の災害時に判断するのは個々人の判断である。誰かが決めてくれる事ではない。そして今回の撤収に関しても、誰かがもう良いと言ってくれる事も無い。始まりも終わりも結局は自分たちで決めなくてはならない。

5月24日朝に遠野の民宿を出て、被災地釜石に入る。ニュースなどでは見てはいたが、実際に来てみるとその光景はあまりに悲惨である。震災後2ヶ月半が経過しようとしているのに、目の前に広がる現実はまだ地平線の果てまで破壊された日本の街が広がっていて、徹底的な破壊の現場なのであった。城山を上り、体育館の中に入ると少し薄暗い館内の一角に仮設診療所があった。1日30人ほどの受診だが処方内容が多く複雑な印象を受けた。慢性疾患の患者がほとんどで、以前は主治医があり、しっかりとフォローされていたはずである。震災で失われたのは主治医機能であったこともよく理解できた。仮設診療所の隣にはつくし薬局さんが併設され、常に笑顔で、謙虚に対応してくれた。つくし薬局は現地の薬局として地域医療に貢献していたが、2店舗を今回の津波によって失っている。また、薬局長が行方不明となっておりスタッフの受けたダメージはいかほどであったか、想像できない。立ってられないほどの揺れを経験した後には自分の生活圏を完璧に破壊され、城山に逃げてきた時には石油基地の火災によって火炎地獄と化した大槌の街を眺めて恐怖と寒さに震えていたという。そんな人たちが今は笑顔で薬局に働いている。私にあの様な強さと謙虚さがあるだろうか、笑顔で日常生活

を送れるだろうか。日々の煩雑な仕事に追われながら「私たちは、今、生かされている気がする」薬局の皆さんはそう言ったのである。日頃の診療にも慣れた頃、何気に仮設診療所に貼ってある新聞記事を見た。大槌の避難所生活をしているご老人の言葉である。「いろいろと不便な事は沢山あるがそんな事は大事な事は無い、今回の震災では多くの方達から大槌は多くの支援を頂いた、いつかこの国のどこかでこの国の人たちが困ったときに、大槌の人がその人達を援助できる日が来るのを見るまでは私は死んでも死にきれない」そう言ってそのご老人は嗚咽を漏らしたそうである。この地の人たちは私たちの想像を絶する忍耐力でこの災害に耐え、そして更にその恩に報う日を夢見ているのである。3時間の漂流のあとに助かったというおばあさんは、若い者には負けないと気丈に言っていた。また、徐脈でふらつきながらも避難所の階段を自分で下りてきて受診する老婆もいた。不便で寒い避難所生活の中でも、努めて明るく振る舞い、気丈に生きていた。そして常に我々医療チームに対する感謝を忘れないのである。沖縄では毎日の診療にすり減っていた自分自身の感情が、大槌でまた潤いを取り戻していくような不思議な感覚があった。この地で僕は医師としての再生を果たしているようなそんな気がしていた。不便な避難所生活の中にも一服の安らぎや、喜びを経験する瞬間がある。例えば、山本リンダや加山雄三の訪問があったときなどは避難所の空気が華やいでいくのを感じ、僅かな時間ではあるが辛さを忘れさせてくれた。そんな訪問の中でも私が忘れられないのは、秋篠宮様と紀子様のご訪問である。秋篠宮様は非常に朗らかな印象を受け、紀子様は神々しく感じられた。

【撤収へ向けての作業】

診療の合間に訪れた現地の診療所、県立病院は大変混んでおり、道又先生の診療所は民家の一角を借りて再開しており、民家の廊下が待合室になっていた。そこでは多くの患者が整然と

並び、非常に混み合っていた。県立病院も同じく大変混んでいた。地域医療は確実に再生を始めていたのだった。この地に我々沖縄医療チームがいるのは地域医療を再生させる事が大きな目標であった。私たちの医療支援活動は確かな成果を上げていたのである。避難所における診療の際には、現地医療機関に誘導するための情報提供が必須となっていた。そのために現在診療中の医療機関リストを作成し、パンフレットとして受診患者に説明しながら配布した。震災発生から現地に入り共に協力し合ってきた様々な機関との調整も大詰めを迎えてきた。5月30日からは宮崎市保健師チームとの連絡事項も、これまで沖縄県が担ってきた役割の一部を引き渡すための話し合いが行われた。釜石での対策本部でも我々が撤収後に城山を巡回診療する日本赤十字社との調整に時間を費やした。特に扱いが難しかったのがカルテの扱いである。医療情報としても重要なカルテであるが、今回の震災における重要な資料となるカルテは今後の大規模災害時にどの様に対処すべきかを考察する為にも非常に重要な資料となる。カルテは直ぐにでも持ち帰り、様々な検証を行いたいところではあったが、城山避難所の診療を日赤に円滑に移行するためには日赤の希望を最優先に考える必要があった。日赤としてはこのカルテをそのまま譲り受けたいというのが希望であり、もっともな要望である。様々な折衝により、カルテは釜石市の災害対策本部に預け、対策本部内の日赤コンテナにおいて厳重に管理し、日赤による医療支援が峠を越えて必要なくなった時に対策本部が責任を持って沖縄県医師会に返却することが合意された。

撤収へ向けて様々な状況が整う中、思わぬ事態も発生した。城山体育館の仮設診療所のスペースは我々が撤収後子供たちのプレイルームとしての使用が検討されているという事実を掴み、早速施設担当の方と調整を行った。日赤の円滑な巡回診療を継続するためにも重要な拠点となる仮設診療所の場所を継続して医療用として使用できるように施設との調整を行った。妥

協案としてキッズルームと医療ルームをパーティションで区切って共用するという案もあったが、インフルエンザをはじめとした感染症を扱う部屋と子供が自由に遊ぶ場所を共有するという事は避けるべきと考えた。かくして最終的には継続使用が認められ、日赤やつくし薬局も継続して医療関連の施設エリアとして利用できる事となった。

2ヶ月半に及ぶ仮設診療所の運用により、物資は非常に多くなり、これを持ち帰る作業も大変な仕事であった。現地で廃棄処分するもの、持ち帰るべきもの、重要な資料として大切に保管すべきものを選び分けて段ボールに箱詰めした。

【お別れの日】

5月31日最終日、朝から快晴であった。雑多であった仮設診療所の内部も3回に分けて全てを沖縄に配送し、綺麗さっぱりもとの状態となった。午前中はこれまで通りの診療を行い、お昼には体育館の全館放送、1階体育館、武道場で最後のご挨拶をした。今後日赤が週4回の訪問診療という形で入る事を説明し、沖縄の医療チームが大槌を去っていく事をご報告した。(写真1) 期せず起こった拍手とありがとうございましたの言葉に、熱いものがこみ上げ、上

手なお別れの挨拶が出来なかった。午後の4時になりいよいよ我々は城山体育館と最後のお別れの時間となった。最後に託されたビニールシートいっぱい書かれた寄せ書きに思わず、胸がいっぱいになる。(写真2) 我々も後を託す形となった宮崎市保健師チームとつくし薬局の皆さんに寄せ書きを贈った。ここで一緒に頑張った日々を忘れる事は生涯あり得ない。(写真3) 城山避難所を去るときに多くの方が見送りに出て来て頂いた。生きている内にもう一度会いたいねと言い涙を流すおばあさん。あれほど多くの人に見送られ、感謝されて見送られた経験は私は今までに一度もない。



写真1) 避難所での説明会、期せずして起きた大きな拍手と「ありがとうございました」の声に言葉が詰まりました。



写真2) ビニールシートに書かれた住民の皆さんからの寄せ書き。最重要書類として厳重に持ち帰りました。



写真3) 最終日、時刻は診療終了の午後4時を過ぎて。つくし薬局さんと記念撮影